

浜寺聖書教会 メッセージ 2023年8月6日 担当；前山晋吾

タイトル；福音宣教の喜び②

聖書箇所；ピリピ人への手紙 1章 15-18 節

命題；神は神の主権と計画によって福音宣教の働きをされる。

前回、パウロの投獄が、かえって福音を前進させることになったことをみた。

① カイザルの親衛隊に福音が伝えられた

② 多くの聖徒に確信が与えられ、福音が伝えられた

今回、パウロの反対者達がいたことと、パウロが伝えた宣教の喜びをみる。

A.福音宣教の動機による2つのグループ (15-18 節)

1.パウロに対するねたみ、争い、党派心によるグループ

①ねたみによって ねたみは殺意やむさぼりや欺きと同様に聖書が明確に示す罪である。

"彼らは、あらゆる不義と悪とむさぼりと悪意とに満ちた者、ねたみと殺意と争いと欺きと悪だくみとでいっぱいになった者、陰口を言う者、そしる者、神を憎む者、人を人と思わぬ者、高ぶる者、大言壮語する者、悪事をたくらむ者、親に逆らう者、わきまのない者、約束を破る者、情け知らずの者、慈愛のない者です。彼らは、そのようなことを行えば、死罪に当たるという神の定めを知っていながら、それを行っているだけでなく、それを行う者に心から同意しているのです。"ローマ人への手紙 1章 29～32 節

② 争いによって

"兄弟たち。あなたがたの間には争いがあるそうで、あなたがたはめいめいに、「私はパウロにつく」「私はアポロに」「私はケパに」「私はキリストにつく」と言っているということです。"コリント人への手紙第一 1章 11～12 節

③ 党派心をもって

"しかし、もしあなたがたの心の中に、苦いねたみと敵対心があるならば、誇ってはいけません。真理に逆らって偽ることになります。"ヤコブの手紙 3章 14 節

"何事でも自己中心や虚栄からすることなく、へりくだって、互いに人を自分よりもすぐれた者と思いなさい。"ピリピ人への手紙 2章 3 節

なぜ、ねたみや争い、党派心をもったのか？かつて、福音宣教をしていたリーダーのいるところにパウロが来て福音を伝えた。すると、多くの人がパウロを支持し働きを認めた。

→パウロの投獄後、人々から自分自身が認められ、称賛され、リーダーであることを求めた。彼らの福音宣教の動機は、自己中心的な願いであった。

結果；純真な動機から福音宣教するのではなく、投獄されているパウロをさらに苦しめる。

2.神とパウロへの愛に基づくグループ

①善意をもって

"神は、みこころのままに、あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、事を行わせてくださるのです。"ピリピ人への手紙 2章 13節

②愛をもって

"私は祈っています。あなたがたの愛が真の知識とあらゆる識別力によって、いよいよ豊かになり、"ピリピ人への手紙 1章 9節

結果；愛をもって福音宣教し、パウロが福音を弁証するために立てられていることを認めた。

B.福音宣教を喜んだパウロの模範 (18節)

"すると、どういうことになりますか。つまり、見せかけであろうとも、真実であろうとも、あらゆるしかたで、キリストが宣べ伝えられているのであって、このことを私は喜んでいます。そうです、今からも喜ぶことでしょう。"ピリピ人への手紙 1章 18節

キリストが宣べ伝えられていることを喜んだ

反対者がいながら、どうしてパウロは喜ぶことができたのか？

パウロは反対者がいたことを喜んだのではなく、福音宣教がなされていることを喜んだ。

神がどのように働きをされているのか？

神が反対者の働きも愛をもってキリストを伝える人々の働きも、福音宣教のために用いておられる。見せかけであろうとも、真実であろうとも、あらゆるしかたで、キリストが宣べ伝えられているのであって、このことをパウロは喜んだ。

→すべてを計画し主権をもって働きをなされる、その神の働きに信頼し、期待し、感謝した。

神の主権と御計画；

神はパウロに対する迫害、投獄をも、福音の前進のために用いられた。

神は見せかけであろうとも、真実であろうとも、あらゆるしかたで、キリストが宣べ伝えられるようにされた。

パウロにとって、主キリスト・イエスがはっきりと伝えられることが、最大の関心であった。パウロにとって、多くの聖徒達にとっても、救い主、主イエス・キリストがすべてであった。

"それは私の切なる祈りと願いにかなっていません。すなわち、どんな場合にも恥じることなく、いつものように今も大胆に語って、生きるにも死ぬにも私の身によって、キリストがあがめられることです。私にとっては、生きることはキリスト、死ぬことも益です。"

ピリピ人への手紙 1章 20～21節

主キリスト・イエスが宣べ伝えられる福音宣教こそが彼らの願いであった。

私たちの心や動機はどうだろうか？

あなたに与えられた救いの喜び、感謝、神への愛が福音宣教や働き、奉仕の動機だろうか？

"また、彼らの間には、この中でだれが一番偉いだろうかという論議も起こった。"

ルカの福音書 22 章 24 節

"あなたがたに新しい戒めを与えましょう。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。

もし互いの間に愛があるなら、それによってあなたがたがわたしの弟子であることを、すべての人が認めるのです。"ヨハネの福音書 13 章 34~35 節

"こういうわけですから、もしキリストにあって励ましがああり、愛の慰めがあり、御霊の交わりがあり、愛情とあわれみがあるなら、私の喜びが満たされるように、あなたがたは一致を保ち、同じ愛の心を持ち、心を合わせ、志を一つにしてください。

何事でも自己中心や虚栄からすることなく、へりくだって、互いに人を自分よりもすぐれた者と思いなさい。自分のことだけではなく、他の人のことも顧みなさい。

あなたがたの間では、そのような心構えでいなさい。それはキリスト・イエスのうちにも見られるものです。キリストは神の御姿である方なのに、神のあり方を捨てられないとは考えず、ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられました。人としての性質をもって現れ、自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われました。

"ピリピ人への手紙 2 章 1~8 節

神から与えられている愛があるので、聖徒は同じ心で一致できる。

神は神の主権と計画によって福音宣教の働きをされる。聖徒は神の働きを信頼できる。

"私は、福音のために、苦しみを受け、犯罪者のようにつながれています。しかし、神のことばは、つながれてはいません。ですから、私は選ばれた人たちのために、すべてのことを耐え忍びます。それは、彼らもまたキリスト・イエスにある救いと、それとともに、とこしえの栄光を受けるようになるためです。"テモテへの手紙第二 2 章 9~10 節

"・・・私たちがこの働きをしているのは、主ご自身の栄光のため、また、私たちの誠意を示すためにほかなりません。"コリント人への手紙第二 8 章 19 節

"ただ、主を恐れ、心を尽くし、誠意をもって主に仕えなさい。主がどれほど偉大なことをあなたがたになさったかを見分けなさい。"サムエル記第一 12 章 24 節